

女川町 支援活動レポート

2012.8.10 ~ 2012.8.11
(宮城県牡鹿郡女川町 向学館にて)



頑張ろう日本！ 頑張ろう東北！



平成24年8月29日(火)
東北被災地応援団 白金支部
工藤 史大

女川町 支援活動レポート

このたびの東日本大震災により、亡くなられた方のご冥福を、心からお祈り申し上げますとともに、

被災された皆様に対し、心からお見舞い申し上げます。

被災地の一日も早い復興を、心からお祈り申し上げます。

1. はじめに

被災から、1年4カ月。我々の訪れる女川町は、少しずつ変化をしています。しかし、未だ、有事である事には変わりありません。

そんな女川町に、何が出来るのか。どう寄り添い続ける事が、出来るのか。一歩ずつ、歩を進めております。

出来る事ならば、女川町にある、全ての仮設住宅、在宅の皆様のもとに、お顔出ししたい。けれど、それは、叶いません。

我々は、少しずつ人数を増やしているものの、行政でもなく、専門家のグループでもなく、仕事をしながら、寄り添う一般人の集まりです。

お役に立てるかは、分からないけれど、微々たる事でも、目的をしっかりと持ち、出来る事をしっかりとやる支援を心がけております。

今回は、女川町で行われている放課後スクール「女川向学館」からの応援要請を受けての訪問となりました。応援団のメンバーの中に教員がいる、その専門性を生かした活動をしてまいりました。

皆様の暖かいご支援、ご協力のもと、行かせて頂き、活動をして参りました。現在の女川町や向学館の様子を中心に、ご報告させていただきます。まだまだ、有事にある女川町は、今後も継続的な関わりを必要としている事を、ご理解頂けますと幸いです。

2. 女川向学館について

(1) 女川向学館とは

「女川向学館」は、2011年7月に設立された、コラボ・スクール(被災地の子どもたちに学習指導や心のケアを行う放課後の学校)の第1校目です。

女川町は、東日本大震災によって大きな被害を受けた町です。住居倒壊率は82.6%と被災地で最も高く、町立第二小学校の児童の9割、第一小では4割が津波で自宅を消失しました。仮設住宅や避難所などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちのために、避難所として使われていた小学校を放課後に借り、英語や数学など学習指導を行ってきたのが、女川向学館です。

(以上、向学館HPより <http://www.collabo-school.net>)

(2) 女川向学館への支援について

東北被災地応援団 白金支部が、女川町を訪れる様になって1年2カ月が経過しました。

この支援活動の間、女川の子供達と触れ合う機会が沢山ありました。

女川町の未来であろう彼らが、何を思い、何に困り、何を考えているのか、とても気になってはいました。

しかし、彼らの未来について、介入出来る程の力は我々には無いと考えていました。

NPO法人カタリバさんが運営する女川向学館の噂は、そこそこで聞いていました。

学校が終わった後、宿題をする場所がない子供達に、場所と、教育を提供する放課後スクール。しかし、実際の活動については知りませんでした。

そんな折、6月に開催した「がんばっぺ 東北！」において、高政さんがお持ち下さった“向学館コラボ蒲鋒セット”を拝見しました。

一緒に向学館のチラシも拝見しました。その時、ほぼ初めて、向学館が困っている事を知りました。

実際に、女川町の方々にお聞きし、調査を始めると、向学館は、女川町に根を下ろした、着実な活動により、信頼されてきていました。

その証拠に、無料であった授業は、町民の希望から、有料化されていました。向学館が長期的に必要なとされている事がよくわかりました。

向学館の方々にお話しをお聞きする事により、子供の未来を本当に考えていらっしゃる事に感銘を受けました。

子供の居場所を作る。

子供達に夢を持って貰う。

夢を持つ事により、未来を考える。

未来の為に、勉強をし、自分の翼を手に入れる。

いつか、女川町の為に役に立つ人間となる。

簡単ではない事を、一つずつ、具現するべく、具体的に活動されていきました。

向学館に寄り添い、支援させて頂く事は、間接的だが、女川町の子供に、未来に寄り添う事となり、弊会の主旨にも合っていると考えました。

向学館との何度かの話し合いや、メールでのやりとりを介し、いくつか、弊社でも出来る事を見つけていきました。

そして、今回、我々のメンバーの中から、教育に特化したチームにより、初めて向学館の支援をさせて頂くはこびとなりました。



もと第一小学校校舎1階が向学館です。



どの子ども真剣に学んでいます。

3. 活動報告

今回の活動はいつもの仮設住宅での活動ではなく、「女川向学館」から応援団へ応援要請を受けての訪問となりました。

初めての向学館訪問ですが、子どもたちの現状に触れることは、これからの支援の形を考えるためにも、大きな意味をもっていると考えます。大きな力にはなれなくても、思いを共にし、共に悩み、よりよい、女川の子どものためにこれからを共に考えていきたいと思えます。

以下、活動内容について報告いたします。

(1) 準備期間

準備期間：2012/8月上旬～2012/8/10

- ・向学館の中尾さんと連絡を取り合い、具体的な質問・困っていること等の情報をいただき、資料を集める。

(2) 支援活動内容

向学館について

- ・向学館の中尾さんが向学館ができるまでの流れや、現状等をお話いただく。
- ・教室環境や、周りの様子を実際に見学する。

授業参観(小学生16:35～17:35 中学生18:00～18:50/19:00～19:50)

- ・小4～中3までの授業を参観する。

意見交換(20:00～21:30)

- ・参考資料の提供
- ・授業で気がついたことについて
- ・向学館の先生方の質問に答える

(3) 活動レポート

今回の活動内容は「応援団のメンバー(教員)が女川向学館の授業を見学し、その後講師の方と意見交換する」という依頼だった。よって現地入りしたのは、小学校教諭である安部と後藤、中学校教諭の石川の計3名であった。活動日が決定したのも約1週間前であった。短い準備期間であったが、リーダーの石川が向学館の中尾さんと連絡を取り合い、向学館の授業形態や困っていることなどの情報を頂き、現地入りメンバー3名で共有し、それぞれが出来る限りの準備をして当日に備えた。□

2012年8月10日(金)

6:30

今回は車1台での訪問である。女川への思いをたくさん詰め込んだ車内では、今までに得た情報をもとに、どのような話ができるかを確認しあった。また、事前の質問の中から、特別支援的な関わり方やユニバーサルデザインの授業づくりを中心とした考え方が役立つのでは、などと話した。今回は女川向学館からのお話をいただいていた活動であるが、一緒に学ばせていただき、悩みを共有し、よりよい方法を一緒に考えていきたいとの思いをふくらませた。

13:30

お盆前の渋滞も懸念されたが、順調に進み、無事女川へ到着。せっかくなので、女川の海の幸を堪能する。旬のウニ丼はとてもボリュームがあり、本当においしかった。これを食べて、女川へ家族・友達を誘って遊びに来たい。そんな思いとともに、胸とお腹をいっぱいにした。

14:30

今回お世話になる「ふじ旅館」へ到着。かわいらしい女将さんが出迎えてくれた。そんな女将さんは、4人もお子さんがいらっしゃるとのこと。これから向学館へ行くことを伝えると、お子さんも通っていらっしゃるとのこと。向学館が女川の町に根付いてきていることがうかがえる。こちらの予定をお話すると、時間外だが、夕飯を取り置いていただけることになった。温かいご配慮に、感謝の気持ちでいっぱいになった。

14:45

女川向学館は、以前小学校として使われていた校舎の1階部分を使って行われている。校舎裏の体育館は天井近くの外壁が崩れていたり、校舎前は大きく地割れの跡が残っていたりと、震災の傷跡が生々しく残っていた。

向学館の中尾さんにご挨拶をし、校内を案内していただいた。校舎の1階部分を使って、4つの教室と多目的室・職寝室・自習室が作られていた。また、多くの支援のもと、学習机や椅子、パソコンやプリンター、プロジェクターや電子黒板、実物投影機などが、使いやすいように整備されていた。



多目的室にはキャスター付きの机と椅子が



自分に合ったプリントを選んで印刷します



校舎前には地割れの跡が…

また、中尾さんから、生徒数はおよそ200人で女川町の小中学生の約3割であること、向学館に通う子どもたちの学習時間が増加し、アンケートから満足していることが分かることなどをうかがった。また、コラボスクールとして、地域と一緒に創ることを大事にされ、向学館の授業が学校の授業より先行しないように気をつけたり、向学館の無償サービスが民業圧迫にならないように気をつけられていたりしていることも分かった。

無償サービスから月謝制に移行することになった背景には、保護者の「もらいっぱなし(支援されっぱなし)ではなく、普通の生活にしていきたい」という思いを大切にされた結果だということも分かった。

向学館には、女川在住の方を中心とした職員の他に、学習サポーターとして全国からボランティアが来ていた。廊下には、スタッフ紹介コーナーがあり、地図や写真で紹介されていた。遠くはアメリカやフランスからも来ていることが分かった。サポーターの職業は様々で、教員を目指している学生から、酪農家まで、多種多様の方が来ていた。

職員室にて自己紹介。全体的に若い先生が多い印象である。今日で最後というボランティアさんの挨拶の後、全員での記念撮影に入れてもらった。職員の仲の良さを感じられた。

16:35~19:50

授業参観をさせていただく。どの子も、一生懸命課題に取り組んでいた。サポートの先生方も子どもたちに寄り添い、とてもよい関係でいることが分かった。何より講師の先生方の子どもに向き合う姿勢が素晴らしい。1人ひとりを丁寧にみつめ、寄り添い、真剣に子どもたちのよりよい明日に向かってご尽力されている様子が伝わってきた。

どの子も「学びたい」という意欲にあふれているようにみえた。先生に言われたことに素直に応じる子ども達が多く、先生と生徒の関係、生徒同士の関係がとてもよいように思った。わかることや褒められることを意欲に変えられる子ども達で、この学ぶ姿勢をずっともち続け「夢」を叶えてほしいと思った。

20:00~21:30

向学館の先生方5名と、応援団3名による協議会。まずはそれぞれ、授業を見た感想を中心に話しし、その後、個々の質問に答えていった。より良い指導について一緒に考えさせていただく時間となった。

先生方はとても熱心で子どもたち一人ひとりの様子をよく見ておられ、また、よく考えていらっしゃる。当日欠席の子どももいたが、その子達の様子まで先生方のお話からよく分った。いくつか具体的な提案をさせていただいたが、このように子ども一人ひとりのことを深く考えていらっしゃる先生方であれば、決して間違った対応はされないだろうと思った。またこのような先生方に教えてもらえる子ども達は幸せだと感じた。

一方で自分の日常を振り返ると、職業人として学ぶことが多く、こちらの方が勉強させていただく機会となった。
これからも、機会を得て一緒に考えさせていただきながら、女川で学ぶ子どもたちとそれを支える先生方を応援していきたい。



電子黒板にテキストを写しだして…



持っていった資料を読みながら



向学館の皆様と

22:00過ぎ 旅館にて

おぼんにのりきらないほどのたくさんのおかずに、感謝の気持ちを感じながら、おいしくいただく。女川へ来ると、人々の温かさを感じ、心地よさを感じる。ああ、女川っていいところだな、女川の人ってすてきな…と、今回も改めてその思いを強くした。向学館でも、子ども達は笑顔であいさつをしてくれ、私たちを受け入れてくれた。子ども達の素直さや学習に向かう姿勢に、改めて教師としての姿勢を問われている気がし、これからの自分の学級作りでも、目の前の子ども達を大切にしていきたいと強く感じた。

2012年8月11日(土)

針浜地区仮設住宅

今回は、お茶道具をお届けに訪ねた。1か月前に訪れたばかりということもあり、外に出ていた何名かの方が顔を覚えてくださっていた。「暑いのにありがとう！」「今度は(このお茶道具で)野点をしてね…。」「今度、針浜仮設でお祭りやるから来たらいいっちゃ！」などとたくさんの温かい声をかけてくださる。こうして顔と顔がつながっていくのが嬉しく、ほんとうにありがたい。女川町に訪れるたびに自分の気持ちが「おじゃまします」から「ただいま！」に変化してきているように思う。これも、継続して関係を作ってきた応援団のメンバーによるものと、他の応援団メンバーや、今までに支援してくださった方々に対しても感謝の気持ちでいっぱいになった。「また来るね！」名残惜しいけれど、仮設住宅を後にした。

4. 活動成果

(1) 専門性を生かした活動ができたこと

- ・相手のニーズに合った専門職のメンバーを派遣し、相手に寄り添うことができた。
- ・小学校・中学校・通級教室と、それぞれの分野に対応できるメンバーがいた。
- ・資料等を共有できた。
- ・教員としての視点で意見交流をすることができた。

(2) 向学館を知ることができたこと

- ・実際に施設や授業を見ることができ、向学館の活動内容を知ることができた。
- ・多くの方の支援を受けて、向学館が成り立っていることがわかった。
- ・子どもたちは、学習したいと思っていることがわかった。
- ・向学館の先生方が、本当に熱心に子どもたちの指導にあたっていることがわかった。
- ・女川の方たちにとっても、向学館が大事にされていることがわかった。

(3) 継続の重要性を感じることもできた

- ・東北被災地応援団として継続して活動していることで、メンバーは変わっても、温かく受け入れていただけた。
- ・顔見知りの方も増え、明るい笑顔が見られるようになった喜びを感じることもできた。
- ・回を重ねることで、相手のニーズに合わせた内容を計画することができた。

5. 補足事項

(1) 参加者（敬称略/順不同）

石川 篤史

安部 由美

後藤 奈津子

(2) 後方支援者（敬称略）

世田谷区立八幡中学校教諭一同

川端 陽子

(3) お茶道具支援提供（敬称略）

知念 ゆき

皆様からの、あたたかいご支援・ご協力のうで、成り立っております。

本当にありがとうございました。

私達は、被災地への支援活動を、継続していきます。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。



平成24年8月29日

東北被災地応援団 白金支部

工藤 史大

★東北被災地応援団 白金支部 WEBサイト★

<http://www.onagawa.e-ouen.jp>

※このレポート内にあります画像の流用及び転用は、一切禁止します。

Copyright (C) 2011 Tohokuhisaichi-Ouendan All Rights Reserved.